



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3348 号 2016.11.17 発行



亀山トリエンナーレ 魂の芸術感じて 菅尾さんが
参加作家に 障害者施設で絵画創作 名張 /三重

毎日新聞 2016年11月16日

創作に取り組む菅尾博司さん=三重県名張市百合が丘東9で、
竹内之浩撮影

知的障害者らが芸術活動などに励む名張市百合が丘東9の通所施設「ワークプレイス栞（しおり）」の菅尾博司さん（48）=同市桔梗が丘6=が、亀山市で来秋開かれる現代美術の公募展「亀山トリエンナーレ」の参加作家に選ばれた。精密な線で描き込んだ動物や仏像の絵を得意とし、芸術系大学の学生や講師ら健常者に交じって審査を通過。展示会へ向け、創作に取り組んでいる。【竹内之浩】

アール・ブリュット展開幕 名古屋

中日新聞 2016年11月17日

地球環境をテーマにした大型作品を出展した

水上卓哉さん=名古屋市東区の名古屋市民ギャラリー矢田で

障害者の芸術祭「あいちアール・ブリュット展」が十六日、名古屋市東区の名古屋市民ギャラリー矢田で始まった。アール・ブリュットは仏語で「生（き）の芸術」の意。制作経験や障害の有無、年齢に関係なく湧き上がる思いのままに生まれた芸術を指す。

芸術祭は二〇一四年に始まり、今年で三回目。県は、十二月九～十一日に市内六会場で開く「全国障害者芸術・文化祭あいち大会」のイベントに位置付けている。

開会式で、出展者を代表して高次脳機能障害がある京都造形芸術大大学院生、水上卓哉さん（26）=名古屋市西区=が「制作することで生きる喜びを感じている。見てもらえる機会をいただけるのはうれしい」とあいさつした。

絵画や陶芸など公募の五百五十点と招待作品三十点を展示し、二十日まで。入場無料。十八日午後四時から、会場隣の東文化小劇場でライブと講演会「自閉症とは何か」、十九日午後二時から会場講演会「芸術から教育、医療、療育へ」がある。



◆通信課程で絵画学ぶ 水上卓哉さん

縦二二四センチ、横二二七センチの大型作品「二百年後の君たちへ Vol. 3」。長寿とされるカメが自由に泳ぐ様子を描いた。

小学六年生の時、自転車で道路を横断中に車にはねられた。高次脳機能障害や体のまひが残った。

今は、好きな絵をもっと学ぶため大学院の通信課程を受講している。

作品には油絵の具のほか、煮出した紅茶に金属を浸して作った塗料や、土を混ぜ込んだ絵の具も使った。「どうやったら思い描いた質感が表現できるか考えた」

過去二回のアール・ブリュット展をはじめ多くの絵画展で入選している。「障害の有無に関係なく、作家同士が刺激し合える環境がほしい」と語った。（竹田佳彦）

バリアフリー仮設入居開始 益城 本震から7か月 読売新聞 2016年11月17日

熊本地震は16日、2度目の震度7を観測した本震から7か月となった。益城町では、県内で最後に整備が終わったバリアフリー型の仮設住宅で入居が始まった。視覚障害者や車いす利用者が入る予定で、入居者からは安堵する声が聞かれた。

同町福富の民有地にある「福富仮設団地」は、段差をなくすなどバリアフリーに対応した木造の仮設住宅6戸が建設された。全て2DK（約37平方メートル）で、出入り口は車いすがスムーズに通れるように幅員を80センチ以上にした。トイレや浴槽の中も1・5倍に広げ、介助者も入ることができる。

弟（43）と入居した作本誠一さん（50）は、19歳の時に屋根から落ちて頸椎を損傷し、現在は車いす生活を送る。地震で町内の自宅は全壊し、通常の仮設住宅や、自治体が民間住宅を借り上げる「みなし仮設」への入居を模索したが、室内に段差があったり、トイレの出入り口が狭かったりして入居をあきらめざるを得なかったという。

避難所のシャワーが使えず、週2回のデイサービスで入浴する生活を送ってきた。入居後、浴室の広さを確認し、「これから毎日、シャワーが浴びられる。長かったけど、やっと落ち着ける」と笑顔を見せた。

作本さんは「障害者にとって使いやすい場所はほかの人にも使いやすい。障害者に優しい町へ復興が進むよう、これからも訴えていきたい」と語った。

紙面審ダイジェスト 精神指定医取り消し 氏名報道は適切 毎日新聞 2016年11月16日

紙面審査委員会は、編集編成局から独立した組織で、ベテラン記者5人で構成しています。読者の視点に立ち、ニュースの価値判断の妥当性や記事の正確性、分かりやすさ、見出し、レイアウト、写真の適否、文章表現や用字用語の正確性などを審査します。審査対象は、基本的に東京で発行された最終版を基にしています。指摘する内容は毎週「紙面審査週報」にまとめて社員に公開し、毎週金曜日午後、紙面製作に関わる編集編成局の全部長が集まり約1時間、指摘の内容について議論します。ご紹介するのは、その議論の一部です。

以下に出てくる「幹事」は、部長会でその週の指摘を担当する紙面審査委員会のメンバーです。「司会」は編集編成局次長です。

<11月4日>

■ドゥテルテ大統領 「ご都合主義」と切り捨てていいのか（省略）

■精神指定医取り消し 氏名報道は適切

幹事 精神障害者を強制的に入院させるかどうかを判断する精神保健指定医の不正取得に関わったとして、厚生労働省は10月26日、指定医49人とその指導医40人を資格取り消し処分にしたと発表した。本紙は27日朝刊対社面4段、本記・サイド・「手口」の図に加え、89人の氏名を当時の所属医療機関名（所在地）付きで報じた。読売・産経は

医療機関名と人数の一覧表、朝日はく主な病院別の処分者数>の表を載せた。氏名を掲載したのは本紙だけだった。異論はなかったのだろうか。

紙面審査委員会では「(氏名を報じる) 医師免許取り消しや医業停止処分に比べてどうか」「社会的制裁を加えることになり、厳しいのでは」という声が出たが、「掲載は適切」という意見が大勢だった。「知っている病院名を探した」という声もあった。読者の関心に応える情報と言えるだろう。記事にあるように「患者の人権に関わる資格でありながら、安直な方法で取得者を増やしてきた精神科医療界の倫理観の乏しさ」は批判されてしかるべきだ。愛読者センターには東京の男性から「名簿を載せたのは毎日だけ。評価している。詐欺まがいの医師を知る一助となる」との声が寄せられた一方、処分を受けた医師から弁明・反発の電話があったという。

司会 医療福祉部。

医療福祉部長 氏名の掲載に関して異論はまったくなかった。昨年、聖マリアンナ医科大学大病院で23人の指定医取り消しがあった時にも全員の名前を掲載し、23人はその後に医業停止1カ月から2カ月の行政処分を受けている。今回は人数は多かったが掲載した。精神障害の患者を強制的に入院させる権限を持つ指定医なので、不正取得は重大な問題で、厚労省が実名で公表しているのに報道機関が名前を載せないという判断のほうにむしろ不可解だ。読者にとっては自分のかかっている医者が不正取得にかかわっているかどうかを知る権利はあるので、それに応えるために今後も同じ判断でやっていきたい。

当事者の医師から確かに連絡をもらった。担当記者が連絡を取ったところ、名前を載せたことよりも、厚労省の処分に怒っていたので、例えば行政不服審査請求などをする場合はきちんと記事化することを伝えて納得してもらった。

「優生思想」は現代社会に脈々と息づいている 障害者施設殺傷事件が突き付けた問題

熊田 佳代子 :NHK文化福祉番組 チーフ・プロデューサー 熊田 佳代子 Kayko Kuada NHK文化福祉番組 チーフ・プロデューサー NHK文化・福祉番組部チーフ・プロデューサー。ディレクターとして福祉分野の取材を多く手がけ、「ハートネットTV」ほか「クローズアップ現代」「NHKスペシャル」などを制作してきた。2014年から現職



東洋経済オンライン 2016年11月16日
優生思想ともいうべき考え方は、現代社会においても脈々と息づいている (写真: ZUMA Press/アフロ)

相模原障害者施設殺傷事件の容疑者で

ある元施設職員は、供述のなかで「障害者はいなくなればいい」と主張した。この優生思想ともいうべき考え方は、現代社会においても脈々と息づいている。NHK Eテレ「ハートネットTV」に携わる制作者は、この事件から何を感じたのだろうか。

「役に立たない」として排除されるかもしれない不安

GALAC12月号の特集は「障害者に愛されるテレビとは!？」

「戦後最悪の犠牲を出した殺人事件」として全国を震撼させた相模原市の障害者施設殺傷事件。2カ月余り(執筆時)が経ったいま、メディアで取り上げられる機会は少なくなり、障害のある人や家族などを除いては、人々の関心も薄れてきているかに見える



る。

しかし福祉番組の制作現場では、心の底に起きた“ざわつき”が治まっていない人も多いのではないかと感じている。

それは、容疑者が「障害者はいなくなればいい」という趣旨の発言を繰り返していたと伝えられ、インターネット上でその思考に同調する声が広がるなど、「優生思想」を巡る問題が目の前に突きつけられたことが大きい。

障害の有無や人種などを基準に人に優劣をつけようとする優生思想は、経済力や運動能力などの“生産性”がなければ「生きる価値がない」という考えに結びつきやすい。NHKの福祉番組班では「ハートネットTV」をはじめ、さまざまな番組を放送しているが、取材させていただく方や視聴者の中には、生産性で人間の価値が量られる社会に生きづらさを感じている人たちも多い。

障害者や高齢者、経済的に困窮状態にある人だけではなく、病気で思うように働けない人、コミュニケーションが苦手だったり他人と異なる特徴があったりして学校や職場に居づらい人など……。一見“普通”にしている、いつ「役に立たない」と排除されるか不安を抱えている側からすると、今回の事件は他人事ではない。そんな“不気味さ”を訴える声が、いまでも番組に寄せられている。

「ホロコーストの“リハーサル”」過去からの警鐘

「優生思想は間違っている」。そう否定する前に、そもそも優生思想はどうして生まれたのか、放っておくとどうなるのかをいま一度過去から見直そうと、私たちは2016年9月下旬に、ある番組をアンコール放送した。昨年11月に初回放送したETV特集「それはホロコーストの“リハーサル”だった～障害者虐殺70年目の真実～」だ。同番組の概要を以下に記す。

600万人以上のユダヤ人が犠牲となったナチスによるホロコースト。しかしそれより前に障害者たちが大量に殺害されていた――。第二次大戦勃発とともにナチス政権は「治癒できない患者を安楽死させる権限」を主治医に与える。「T4作戦」と呼ばれるこの作戦により全国6カ所の施設で、医師らに「生きる価値がない」とされた患者たちがガス室に送られ殺された。2年の間に精神・知的障害者や治る見込みがないとされた患者7万人が命を奪われ、作戦中止命令が出されたあとも各地で医師らが自発的に殺害を継続、終戦までに合計20万を超える人が犠牲となったのだ。

番組では、ダーウィンの「進化論」を人間にも当てはめようとする優生学が当時の医師らによって積極的に取り入れられた経緯を検証。そしてナチスが経済や覇権などさまざまな課題を解決する手段として、優生思想を利用したことを振り返った。ドイツを訪れた日本障害者協議会の藤井克徳代表が遺族や研究者と対談し、同じことを二度と繰り返さないために何が必要かを考えるという内容だった。

番組を見返すと、改めてさまざまな人の言葉が心に響く。T4作戦を長年研究してきた歴史学者は、そもそも人間を「健康で社会に役立つ者」と「劣っていて価値のない者」に二分する考えが社会にあったことが、障害者ひいてはユダヤ人の大量虐殺の土壌になったと指摘。「人間は、命の価値を尊重しなくなると人が殺せてしまうのです。社会の中に、病、障害、苦悩、死が存在することを受け入れようとする意見が、かつて今も少なすぎます」と警告する。

“内なる優生思想”を見つめる番組として何ができるか

なぜそのような社会になるのか。それは、優生思想はヒトラーだけでなく私たち各々の心にも深く関わる問題だからだという指摘も見逃せない。「自分と他者を比較して差別する心、“内なる優生（越）思想”は誰しも持っている」と、藤井さんは言う。私たちはETV特集とは別に「ハートネットTV」で同じテーマを放送したが、そのなかでドイツが過去の過ちを繰り返さないよう、教育や当事者運動を徹底して続けている様子を伝えた。その特徴は、一人ひとりの“内なる優生思想”に向き合い、そのうえでどうしたら克服できるかを考えていることだ。

例えばベルリンにある小学校では毎月、ナチス時代について考える授業が行われている。さまざまな人種や障害のある子ども、ない子どもと一緒に、なぜ殺される人と生き延びる人が選別されたのか、もし自分があの時代に生きていたらどうなっていたかを真剣に語り合う。

また障害者権利擁護活動に取り組むリーダーは、「あなたは障害者、あなたはユダヤ人、あなたは同性愛者、あなたは外国人、あなたは女性だと何事も分類するから、差別が生まれ迫害につながるのだ」と語る。そして差別されることで「自分のことを価値がないと思うのも非常に危険だ」とも言う。「私は他者より良くも悪くもなく、私の人生は他にないただ一つのものと考えることが大事だ」と訴え、当事者運動を続けていく決意を語っていた。

話を日本に戻そう。私たちは今回のような事件のあと、犠牲者を「何の罪もない、一生懸命生きている人たち」と表現することで、障害がある人の命を守る根拠を伝えたつもりになってしまいがちだ。しかし、そのような“感情”だけでは優生思想を抑える力にはならない。程度の差こそあれ、同じような暴力事件は起きており、これからも起き続けるのではないかという恐れもある。

では一体、優生思想の亡霊を前に、どんな番組を私たちは作っていけばいいのか？ 妙案があるわけではない。あきらめずに根気強く問い続けるしかないのだと思う。しかしだからこそ、これまでつながってきた当事者と共に、番組のあり方やメディアの役割をより真剣に考えていくチャンスなのかもしれない。それが、福祉番組にいまできることかと思っている。

社説：ポケGO運転 ぶつかるまで気付かぬ

中日新聞 2016年11月17日

小学四年の男児が犠牲になった交通事故を機に、運転中の「ポケモンGO」操作阻止を求める動きが広がってきた。問題はポケGOに限らない。危ない「ながらスマホ」運転の根絶につなげたい。

横断歩道を渡っていた男児がトラックにはねられて死亡した事故は先月二十六日、愛知県一宮市の市道交差点で起きた。

逮捕された三十六歳の男は、スマートフォン用ゲーム「ポケモンGO」で遊びながら運転しており「ぶつかるまで男児に気付かなかった」と供述した。

運転中のスマホ使用は、もちろん、道交法で禁じられている。ポケGOにも、運転中の操作を制限する機能はあった。男は、その制限を解除していたとみられる。

大人がルールを無視し、ルールを守った子どもが犠牲になる。あまりにも理不尽ではないか。

七月の配信開始以降、ポケGO操作中の運転者が起こした死亡事故は、今回を含め既に三件。バスの運転手が遊んでいた事例も相次いで発覚し、ポケGO運転の横行は想像に難くない状況である。

「これ以上、犠牲者が出ないように」という男児の父親の訴えに応え、一宮市や愛知県警は、運転中には使えなくするようポケGOの運営会社に要請した。会社側は、一定速度以上での移動中は遊べぬように仕様を変更した。

一步前進ではある。だが、一宮署の取り締まりでは、仕様変更後もポケGO運転が三件摘発されている。どうすべきか。

交通事故総合分析センターによると、第一当事者が携帯電話等を使用していた事故は一時減少傾向にあったが、二〇一〇年から増加に転じている。内訳を見ると「通話目的」は減少が続く一方、「画像目的」が急増。一四年には計千七百二十九件の事故のうち七百四十九件を占めていた。

つまり、ポケGO以前の問題として、そもそも、スマホの爆発的な普及に事故対策が追いついていなかったわけである。

諸外国も危機感を強めている。今夏、スマホ運転のトラックが突っ込み母子四人が犠牲

になった英国は、罰金と違反点数を倍の重さに改める方針だ。メイ首相は「早急に意識を変えよ」と呼び掛けた。日本でも、自民党が厳罰化の検討を始めた。

ぶつかるまで気付かなかった、と加害者に言わしめるスマホ運転を許すわけにはいかぬ。「飲酒運転に並ぶ罪悪である」という認識を社会全体で共有したい。

社説：高齢運転事故 自分の身体能力と向き合おう 読売新聞 2016年11月17日

悲惨な事故の連鎖を断ち切らねばならない。

高齢ドライバーによる交通死亡事故が相次いでいる。安倍首相は関係閣僚会議で、新たな対策を検討するよう指示した。

75歳以上の免許保有者は、昨年末時点で478万人に上る。10年間で倍増した。今後も、車が凶器となる事故は起き得る。

横浜市港南区で10月、87歳の男が軽トラックで集団登校の列に突っ込んだ。小1の男児が死亡し、7人が重軽傷を負った。男には認知症のような症状があり、横浜地検が鑑定留置して調べている。

75歳以上の方は、3年ごとの免許更新の際、記憶力と判断力を測定する認知機能検査を義務付けられている。男は3年前に検査を受け、異常はなかったとされる。

現制度では、検査で認知症の疑いが指摘されても、過去1年間に一定の違反がなければ、診察を受けなくても免許は更新される。

これでは検査の意味がない。75歳以上による昨年の死亡事故458件のうち、直近の検査で認知機能の低下などがみられた運転者が半数近くを占めた。防げた事故も少なくなかったのではないか。

来年3月に施行される改正道路交通法は、更新や違反時の検査で認知症の恐れがある免許保有者全員に診察を受けさせる。認知症と診断されれば、免許取り消しや停止とする。認知症患者が運転しないよう徹底する必要がある。

症状の進行が早いケースもあろう。検査を受ける頻度を見直すことも検討課題だ。

今月に入り、栃木県下野市と東京都立川市の病院敷地内で車が暴走し、計3人が死亡した。運転していたのは、ともに80歳代の男女だ。アクセルとブレーキの踏み間違いなどの疑いがある。

加齢によって、運動能力や反射神経が衰えるのは避けがたい。高齢ドライバーが、自らの身体能力と冷静に向き合うことが重要である。不安を感じたら、免許の返納も考えるべきだろう。家族らも日頃から異変に注意を払いたい。

都市部以外では、車なしには暮らせない地域がある。ハンドルを握る際には無理をせず、くれぐれも安全運転を心がけてほしい。

四つ葉のクローバーなどをあしらった高齢者マークを付けた車に対しては、周りのドライバーが思いやることも大切だ。

高齢ドライバーにとって、自動運転車は大助かりだろう。実用化までの間、メーカーは、自動ブレーキや踏み間違い防止装置などの性能向上に努めてもらいたい。

社説 堺・男児不明事件 保護できなかったのか 毎日新聞 2016年11月17日

堺市の4歳男児が約3年前から行方不明となった事件で、大阪府警は傷害致死容疑で逮捕した父親の供述から大阪府南部の山中を捜索し、子供とみられる遺体を発見した。

痛ましい事件に胸が締めつけられる。児童相談所や自治体が生存確認に手立てを尽くせば、男児を保護できた可能性もある。行政機関の対応や連携のあり方を検証すべきだ。

男児の母親も保護責任者遺棄致死容疑で逮捕され、「夫は何度も暴力を振るっていた」と日常的な虐待をうかがわせる供述をしている。遺棄時期などで供述に食い違いがあり、捜査で真相を解明してもらいたい。

男児は生後間もなく児童福祉施設に預けられ、2歳になる直前の2013年12月、両親が引き取り、大阪府松原市で暮らし始めた。ところがそれ以降、男児に関する情報が行政機関の間で共有されず、男児の所在をつかめないままだった。

松原市は昨年6月、3歳半健診の案内を通知したが、両親は受診を延期すると電話で6回連絡し、同年12月、堺市に転居した。その間、松原市の担当者は家庭訪問などの安否確認をせず、松原市が堺市に「保護の必要な子供がいる」と連絡したのは今年3月になってからだ。

乳幼児健診は虐待の予防や早期発見につながる。大阪府は指針で、受診しない子供がいれば保健師が訪問するなどして安否を確認するよう求めている。虐待を防ぐために策定した指針が形骸化しているのではないかと指導を徹底してほしい。

昨年2月には、男児の妹の体にやけどの痕があるのを医師が見つけ、大阪府富田林子ども家庭センター（児相）と松原市が協議し、母親によるネグレクト（育児放棄）と認定した。男児への虐待も疑うべきなのに、市の担当者は両親から「祖母宅にいる」と聞いただけで、男児の所在を確認しなかった。

男児が施設に預けられたのは、両親が別の詐欺容疑で逮捕されたためだが、両親はその後、乳児だったおいの行方不明に絡んで死体遺棄容疑で書類送検され、時効で不起訴となった。児相は経緯を把握していたが、男児の妹を巡る協議の場でも松原市に説明しなかった。児相、自治体ともに虐待への危機意識が足りなかったと言わざるを得ない。

厚生労働省が7月に発表した全国のお不明児25人の中に男児は含まれていなかった。昨年6月時点で乳幼児健診を受けていない子供らが調査の対象で、男児の3歳半健診は翌7月以降だったため外れた。関係機関が情報を共有して虐待を防ぐのが調査の狙いだが、対象から漏れるケースは他にもあるはずだ。調査方法の見直しも検討すべきだ。

【主張】堺男児不明事件 情報共有し子供の命守れ 産経新聞 2016年11月17日

行政間で情報が適切に共有されていれば、事件は防げた可能性があったのではないかと。子供を守るために、躊躇（ちゅうちょ）はいらない。再発防止のために何ができるのか。徹底的に検証してほしい。

大阪・奈良の府県境の山中で、所在不明になっていた住民登録上4歳の堺市の男児とみられる遺体が見つかった。

まず非難されるべきは、両親の行いである。

男児の児童手当をだまし取ったとして、10月に詐欺容疑で逮捕された後、父親は、昨年12月に男児を暴行し死亡させた傷害致死容疑で、母親は保護責任者遺棄致死の疑いで再逮捕された。遺体の遺棄現場についても父親は虚偽の説明を行い、発見が遅れた。身勝手な許し難い所業だった。

一方で行政も、子供を守ることができなかった。平成24年、この両親のおいが大阪府の別の自治体で所在不明になり、大阪府警は生活保護を不正受給した詐欺容疑で両親らを逮捕した。おいの遺体は見つからないまま、死体遺棄容疑は公訴時効となった。

所管する児童相談所は男児を施設に預けたが、25年に同府松原市の両親の元に帰し、両親が逮捕されていた情報を市には伝えなかった。問題のある保護者に子供を戻した判断が妥当だったか。市や警察の関与は必要なかったのか。反省すべき点は多い。

松原市の対応にも問題がある。両親は再三、男児の3歳児健診の延期を求めた。市職員が自宅を訪ねても「祖父母に預けている」などとかわされ、所在確認はできなかった。昨年12月、両親が堺市に転出した際も、松原市が男児の健診未受診を堺市に伝えたのは3カ月後だった。

おいの事件を受けて府は、乳幼児健診の受診日を繰り返し変更する場合は虐待の可能性などとする指針をまとめていたが、生かすことができなかった。

今年5月には、児童虐待防止法と児童福祉法が改正され、家庭に強制的に立ち入る手続

きが簡略化されるなど、児童相談所の権限が強化されている。

虐待は子供の肉体も精神も著しく傷つけ、その死にも直結する。かわいいはずのわが子を虐待する親が存在する現実を忘れず、児相、自治体、警察は情報を密に共有し、あらゆる手段で悲劇の連鎖に終止符を打ちたい。

社説：いじめの手記 きみは独りじゃない

朝日新聞 2016年11月17日

鉛筆で書いたんだろうか。きみの手記を読んで、胸が張りさけそうになりました。

「いままでなんかいも死のうとおもった。でも、しんさいでいっぱい死んだからつらいけどぼくはいきるときめた」

見知らぬ土地でばい菌あつかいされたり、支援物資の文房具をとられたり、福島から転校してきた5年前からずっとつらい思いをしてきた。それが、いたいほど伝わりました。

きみは独りじゃない。

そのことをまず知ってほしい。学校の外に目をやれば、味方はいっぱいいる。そして、学校以外に自分の居場所をみつけて、いまかつやくしている大人も大勢いる。東日本大震災のぎせいとなって生きられなかった多くの人やその家族も、「生きる」という決意を後おししてくれるはずです。

原発事故で自主避難した横浜で、きみがいじめにあったことは、すこし前の新聞にのっていました。でも多くの方は今回あらためて、きみや同じような立場の人たちに思いをさせるようになった。手記の公表を弁護士さんはためらったそうだけど、「ほかの子のはげみになれば」と、きみが求めたと聞きました。その勇気をありがとう。

東日本大震災では、いまも大勢の人たちが、住みなれた家をはなれて避難しています。

事故を起こした原発のある福島県双葉町の伊沢史朗（いざわしろう）町長が先週、こんな話をしていました。避難先で町の人がパートなどにつくと「賠償金をもらっているのに」とかげ口をいわれるというのです。かといって働かずにいると、今度は「賠償金があるからだ」といわれる。

同じ学年の子たちが、きみに「ばいしょう金あるだろ」と言い、大金をはらわせたことなどは許せません。しかし彼らも、そんなまわりの話を耳にしていたのかもしれない。これは大人の社会の問題です。

福島からの避難者への冷たい仕打ちは各地で問題になっていたし、きみもサインを出し続けていた。だれか気づいてほしい、助けてほしい。そう思っていたんじゃないだろうか。

なのに学校の対応はまったく不十分だった。ほかの保護者からの連絡で、お金がやり取りされているのを2年前に知っていながら、相談をよせたご両親に伝えなかった。教育委員会も本気で向き合ってほしかった。同じことをくり返さないようにしなければなりません。

きみが将来、自分のことも、他人のことも大切にできる大人になることを信じています。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も



大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行